



堀口大學全

補卷 1



堀口大學全集

補卷

堀口大學全集 補卷 1

昭和五十九年一月二十日印刷
昭和五十九年一月三十日發行

著 者 堀 口 大 學

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田区富士見二一五—十二
電話(東京)二六三—九二一八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

定價八五〇〇圓

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論・研究、隨想、翻譯作品（小説・戯曲・評論・隨想）等の各分野に互って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（補卷Ⅰ）は翻譯作品Ⅰとし、著者の單行本單位で翻譯された小説作品の中から代表作六點を選出し、刊行年代順に採録した。

一、本卷に採録した作品は、アンリ・ド・レニエ『燃え上る青春』、ボオル・モオラン『夜ひらく』、『夜とざす』、レイモン・ラディゲ『ドルヂェル伯の舞踏會』、サン・テクジュペリ『夜間飛行』、ジュウル・シュベルヴィエル『ノアの方舟』の六點である。

一、本卷本文は、これらの作品が近代文學史にもたらした役割と業績を尊重し、すべてそれぞれの單行本初版を底本として使用した。

一、本卷に採録した作品中、著者・譯者以外によって記された作品も、底本とした單行本の本文として扱われている場合には、底本の全貌を損なわぬためにあまねく採録した。また後版に付されている「あとがき」「書評」の類いは、すべて卷末「解題」に資料として掲出した。

一、本文の漢字・假名遣等は、原則として底本通り（本卷の場合はすべて正字舊假名遣）としたが、次のような場合には訂正した。

1 誤字・誤植と判断されたもの。

〔例〕詫びる↓詫びる、豊饒↓豊稷、風彩↓風采、煙葉↓煙草、瓣髮↓辮髮、復雜↓複雜、等。

2 假名遣・ルビの誤り（但し、用ひる、及び音便に關する表記は、底本通りとした）。

〔例〕しまう↓しまふ、とうとう↓たうとう、されやうと↓されようと、小じんまり↓小ぢんまり、等。

3 脱字・或いは送り假名不足で不自然なもの。

- 〔例〕 歸〔つ〕て、聞〔え〕さへ、横〔ぎ〕り、思ひ出〔さ〕せた、書き損〔じ〕、等。
- 4 著者の訛用と判断されたもの。
〔例〕 迎ひ↓迎へ、結ひて↓結へて、貰え度い↓貰ひ度い、イツセンス↓エツセンス、等。
前後が轉倒したもの。（但し、發表當時の慣用と判断されたものは底本通りとした。）
イ 訂正したもの。
- 5 〔例〕 開展↓展開、位地↓地位、重貴↓貴重、材題↓題材、現實する↓實現する、等。
ロ 訂正せず底本通りとしたもの。
- 6 〔例〕 爭鬭、智機、細微、敗類、左往右往、乾燥無味、等。
俗字（但し、同字と見做される場合は雙方を竝用した）。
イ 正字に改めたもの。
〔例〕 耻↓恥、場↓場、濶↓闊、戯↓戲、涼↓涼、熱↓熱、纏↓纏、箴↓箝、等。
ロ 雙方を竝用したもの。
〔例〕 竝↓並、痴↓癡、蟲↓虫、双↓雙、絲↓糸、等。
- 一、次のような場合は底本通りとした。
 - 1 底本發表當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判断できない用法。
〔例〕 素的、反譯、華車、自動車、功蹟、無暗、相だ、スポオト、心よい、等。
 - 2 著者獨自の用法。
〔例〕 抱回、布團、異人原、すれすれ、着僧い、ひとつくるめ、…せない、等。
 - 3 同語の異書體。
〔例〕 何所⇨何處、煖爐⇨暖爐、翻譯⇨翻譯、始⇨初、亘⇨互、着⇨著、沙⇨砂、俐巧⇨利巧⇨利口、等。

4 踊り字。

一、地名等で判讀が極めて困難な漢字・熟語にはルビを付した。

〔例〕執念^{しこ}く、龍動^{リウドウ}、暗車^{アンシャ}、護謄輪^{ゴトウリン}、桃^ホ〔花〕心木^{シンキ}、諾威^{ノルウェー}、等。

一、當時の一般的慣用と見做されるものの中でも、普遍性を缺くと判断されたものは訂正した。

〔例〕不拘↓拘らず、一寸と↓一寸、お可笑く↓可笑しく、等。

一、外來語や外國の地名人名の片假名表記は、拗・促音を含め原則として底本通りとしたが、とりわけ同一文中に異表記の頻度の多いものに關しては、より普遍的な表記に統一した。

〔例〕レキサンブルグ^リレキサンブル^ルリリュクザンブルグ^リリュクサンブル、マドモアゼル^ルマドモワゼ^ル↓マドモワゼル、等。

一、外國語の原綴は、明らかな誤植と思われるものを正すにとどめた。校異・校註に記載のない箇所は、すべて底本通りである。

一、本文中の會話體の表記はそれぞれの底本によってまちまちであるが、原則として各底本のそれぞれの統一基準に従い、異表記は訂正した。また會話體末尾の句讀點は脱落しているものを補った。

一、本文中の「」、『』に關しては、書名のみに『』を使用し、他はすべて「」に統一した。またそれらが缺けている場合は補った。

一、底本に伏字（○○○）が用いられている箇所は、後版によって「」内に抹消された本文を復元した。

一、底本を訂正出来ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には、本卷に採録した各單行本の全書誌、及び資料として後版の「あとがき」等をすべて採録し、作品の推移を明瞭にした。

翻譯作品Ⅰ

燃え上る青春 5

夜ひらく 213

夜とざす 317

ドルヂェル伯の舞踏會 431

夜間飛行 539

ノアの方舟 601

作品細目 689

校異・校註 693

解題 731

堀口大學全集
補卷
1

翻譯作品 I

燃え上る青春

アンリ・ド・レニエ

燃え上る青春の序

堀口大學君曾て西班牙より歸朝し更に南米伯刺西爾に之かんとするや質を捐て翻譯詩集昨日の花一卷を刻しぬ。時に君余に請うて其の序をつくらしむ。尋で月光とビエロの著あり。再び余の序をかかぐ。爾來殆十年君の著述翻譯年と共に富む。就中佛蘭西語の詩集TANKASと題するものあり。佛蘭西詩壇の領袖ポール・フォール其巻初に序をつけ頻に君が才藻を稱揚す。君が聲名忽海外に高し。今茲癸亥の年初秋、君遍く舊雨を訪はんとし鴻雁に先じ海を踰えて還る。一日余を敝廬に訪ひ携來る所の稿本を示し重てまた序を索めらる。輒把つて之を觀るに佛蘭西文藝院の會員アンリイ・ド・レニエの小説LA・FLAMBEの譯著なり。アンリイ・ド・レニエは當代佛蘭西象徵派詩人中の翹楚にして、其著作は詩集小説を合せて正に三十卷に近し。皆余の多年反復熟讀して倦む事を知らざるもの。若し余をして現時海外著名の文學者の中最余の心酔するものを挙げしめんか。余は先指をレニエ

ーに屈し此につぐにアナトール・フランス並にアンドレ・ジードの二家を以てすべし。堀口君亦よく之を知り其外遊中レニエが新作の市に出るを見るや必一本を購つて郵寄せらる。歐洲大亂の時吾國學藝の士皆舶載の新書を獲るに苦しみたり。然るに余は獨堀口君の海外に在るの故を以て愛好の新書を手にするに毫も太平の日に異らざるを得たり。レニエの著作の余に於けるや其感化怡良師に見ゆるが如し。而して堀口君の余に於けるや其親善當に兄弟に比すべし。今レニエが好著の翻譯堀口君の手によつて成れるを見る。余の喜何ぞこれに如くものあらんや。堀口君初め翻譯の筆を執るに臨んで書を原作者に寄せ其教を乞ふこと少からざりしと云ふ。此一事を以て見るも堀口君の譯著は近事世に流行する所の杜撰なる翻譯物の類に非ざるや明なり。ここに漫然原作者と其譯述家とについて余の知る所を記し以て序を爲すの責を塞ぐ。

大正十二年十月

永井荷風

燃え上る青春

第一章

曳かれた窓掛が承塵の上を滑る音に、眠を醒まされた時、アンドレ・モオヴァルは、直ぐには眼を開かうとはしなかった。彼は長い一夜の安息も悉く拭ひ去る事の出来ぬやうな、若い目の眠たさの爲めになほも眼瞼の重たいのを感じるのであつた、出来る事ならば、彼はよろこんでもつともつと眠つたであらう。それと同時にまた彼は、誰かしら室の中を右往左往してゐるのを、うるさい事に感ずるのであつた。何故に下男のリュウは、ブラシをかけるだけの衣服を、そつと取つて出て行く代りに、このやうにまごまごしてゐるのかしら？するとその時に、アンドレ・モオヴァルは隣寸をする音を耳にした。やがて彼は思ひ出した。前夜彼の母が下男にかう云つたのであつた。「明日の朝、若旦那のお室に櫛櫛薪をして上げてお呉れ、またもう、そろ／＼寒くなつて来たから。」すると忽ちにこの青年の不機嫌が満足に變つて行つた。

彼は寢床から起き出る前に、なほしばらく煖爐の火がよく燃え上るのを待つ事にした。さうして衣服を着換へる前に、暫時、脚あぶりをしようと思つた。懶げに彼は壁の方へ寢返りを打つた。下男のリュウは室から出て行つた。小枝がばちばちと音を立て、燃え上つた。やがて乾いた薪の爆ける音が起つた。これは、ヴァランジュヴィルから、大きな袋に入れた他の荷物と一緒に持つて歸つた松笠が燃えてはねる音だつた。リュウがそれを細かい木片と交ぜて用ゐたのであつた。

アンドレ・モオヴァルは寢床の上に腰かけて、二本の足をぶら下げたまゝ、陽氣な秋の櫛火に眺め入つた。櫛火は煖爐の中をその鋭い火炎と、生々した火花とで一ぱいにした。松毬は樹皮と松脂の匂ひと一緒に燃えて行つた。彼の心の中には、海を見下した斷崖の上の小さな松林が浮んで來た、その林の中で地の上に黄色く散り敷いた松葉の間に、彼自らが、これ等の松毬を拾つたのであつた。ノルマンディ風の古びた莊園が彼の目に浮んで來た。それは叔母さんの、ド・サルニイ夫人の莊園であつた。然るに今ではもう暑中休暇は終つてゐた。彼はそれをかなしいことに思つた。已に十日以來、家人は毎朝早く彼を呼び起すのであつた、ヴァランジュヴィルにゐた時のやうに彼の朝寢を許さうとはせずに。幸にも今朝は母がこの陽氣な焚火をする事に氣がついたのであつた。懶惰な寢醒を勇氣づけるのに、何物も、此のものを煖める明

るさには及ばなかつた。

彼は煖爐に近よつて、低い椅子の上に身を落着けた、さうして彼は自分の身體が極めて輕快なのを感ずるのであつた。今では彼がヴァランジュヴィルを愛惜する心も少しは薄らいでゐた。巴里にはさすがにいい處があつた。アンドレは其處に彼に親しみのある書物を再び見出すことをよろこんだ。書物と云つても彼の學課用の書物では勿論なく、彼が其處に詩や小説や歴史や紀行文を読む種類の書物であつた。彼の法料の課業は——彼は三年生になつた所であつた——彼が欲するだけの餘暇を與へてゐた。彼は父を満足させる爲めに、講義に出席してゐるのであつた。さうして試験を通過する爲めには、彼は専ら、復習教師のペルラン氏を當にしてゐるのであつた。試験の期日がいよいよ切迫して來た時になつてから、ペルラン氏の持つてゐられる多年の經驗を少々分配して貰ひに行けば足りるのであつた。その日の來るまではゆつくりしてゐればいいのである。それは兎に角、父の手前、時間までには身支度をすまして置いた方が都合がよかつた、尤も少し急ぎさへすれば、どんな時でも學校へは十分時間前には着けるとは云ふものゝ。彼位の年頃には誰でも丈夫な脚を持つてゐるものである。

彼は自分の脚を眺めた。樺火の炎が其處に生えた毛をやゝ驚色に見せてゐた。二本の脚は肉つきよく、頑丈に見えた。

彼は兩脚の毛深い圓みの上を一種の矜の感情を持つて撫で廻した。兎に角、彼はもう子供ではなかつた、彼はいつか青年になつてゐた。今日までの彼の生活は彼の家族のそれと密着してゐた、彼の二十四時の何れの部分も彼の家族のそれと切りはなされぬ程に。然るに今となつて、彼は少しづつこの不斷の共同生活から遠ざかりつゝある事を感じるのであつた。元より彼はこの分離を強調しようとは思つてはゐなかつた、然し彼には、兩親もこの必要を享け入れて暗に承認してゐる事が感ぜられた。吾々の若き日に若しも義務があるとするとらば、同時にまたそれには、權利もあるべき筈である。さうして彼はその義務をよろこんで果すことを拒まなかつたと同時に、他の一方に於て、その權利を他人に承認させることに躊躇するものではなかつた。それにしてもまた、これらの權利が如何なるものであるかも彼の頭の中では可成り漠然たるものであつた。彼は家庭にあつて幸福であつた、それに若し彼が現に享有してゐる自由以上に、何物か新しい自由を要求せねばならぬとしたならば、彼はそれを發見する事に随分困難を感じたであらうと思はれるのである。それにも拘らず、彼は彼をしてその家庭と對立して權利を主張する事を餘儀なくするやうな或る事情が生じて來るであらうと、ぼんやりと豫感するやうに思ふのであつた。この豫見は彼の目には可なり重大な事として映つた、然しその割合に彼はこの事の爲め

には大した心勞はしてゐなかつた。かう云ふ時には彼の目には、彼の有する十九歳がその全容儀を整へて堂々と映るのであつた。さうして彼はこの若さに對して特別の敬意を他から當然拂はるべきものであると思ふのであつた。

彼が期待してゐるこれらの尊敬は、家人が彼の爲めに拂ふ注意とあまやかしと全然共存し得る性質のものであつた。彼とても彼が家庭でうける所の惜しげもないデリケートな親切をふりすてようとは決して希はなかつた。例へば、彼の母の心づくしの、彼の目ざめを和げる爲めの今朝のこの焚火も彼の起床を楽しく陽氣にするのであつた。彼は自分が必要以外に子供らしく甘やかせられてゐるとは決して思はなかつた、然るに事實彼はモオヴァル夫人の子煩悩から年不相應に甘やかされてゐたのである。今彼の目の前に燃え盛るこの篝火にしても彼にとつては彼の若さに對する一種の寓意と讃辭とに外ならぬと思はれるのであつた。彼は彼の若さが彼の爲めに豫約する、活潑な、絢爛な、炯明な、幸福なものの姿を其處に見るのであつた。彼は輝やかしい篝火を賞味した。熱して行く彼の兩脚から満足が彼の全身に擴がつて、彼の心の中に人生の遠景を照し出した、彼はこのまま、長くかうして夢想を續けたであらう、もしも此の時に、下男のジュウルが疊みなほした衣服と一手桶の熱湯とを持つて室へ入つて來なかつたならば、ジュウルは行きかけに、やさしい一瞥を燃えさし

の松毬の上に投げて行つた。松毬が彼にヴァランジュヴィルを思ひ出させたからである、彼はそこから來てゐるのであつた、そこからこの下男をモオヴァルの一家が彼等と一緒に連れて歸つたのであつた。

アンドレは決し兼ねてゐた。彼はこの新來の下男に對してあまりに親しげにふるまふことも欲しなかつたが、と云つてまた餘りに嚴格にふるまひたくも無かつたのである。その爲めに、彼は彼に何とか言葉をかけてやりたいと思ひ乍ら、然しその爲めに長い會話を始めるやうなことはしたくないと思つた。つまり今の場合、彼も亦重要なこの家の一員であることを下男に示し、且つは下男が忠實に彼に仕へるべきであることを感じさせることが必要なのであつた。彼は躊躇した、やがて、下男が浴盤に湯を注ぎ入れるのを見て、アンドレは決した、

——ジュウルや、どうかね、ヴァランジュヴィルがなつかしいかい？ それとも巴里に追々慣れて來るかい？」

ノルマンディ生れの下男は微笑した。彼ははつきりした返事がしたくなかつたのであらう。彼はかう云つた、

——本當ですよ、若旦那！ 巴里はヴァランジュヴィルでございませぬ、さうしてヴァランジュヴィルは巴里ではございませぬ。」

さうして四角張つてかう云つた、